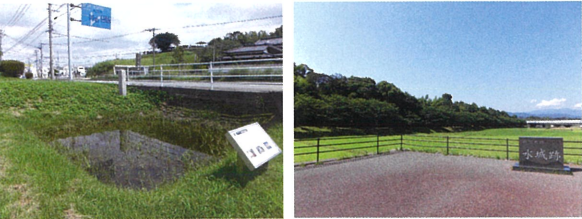


特別史跡 水城跡 文化遺産巡りマップ



水城木樋跡発掘風景
写真提供 太宰府市教育委員会



水城跡出土土器
写真提供 九州歴史資料館



大野城市 水城ゆめ広場



特別史跡 水城跡 文化遺産巡りマップ

文化遺産からはじまるまちづくり

令和3年3月3日
水城跡 史跡指定100年

太宰府文化遺産調査ボランティア 水城西小学校区班・国分小学校区班 公益財団法人 古都大宰府保存協会

令和2年12月増刷

特別史跡水城跡と周辺文化遺産

国際的な緊張状態の中、国家事業として築造された「水城」は『日本書紀』にその名が記されています。その歴史的・学術的価値が他に類を見ない例であることから、国の特別史跡に指定されており、1350年に及ぶ長い歴史のなかで様相を変えながらも、地域の人々に親しまれ、見守られながら、今なおその威容を誇っています。

現在、水城跡の東西に位置する水城地区・国分地区・吉松地区には、水城跡に関連する遺跡をはじめとして、由緒ある寺社や地域で守り受け継がれてきた石碑や祠など数多くの文化遺産が残されています。

太宰府市では、平成20年度より市内に残る数多くの文化遺産を市民自らの手で調査・記録し、未来へと伝える文化遺産事業を行ってきました。本マップは、調査ボランティアの方々による調査成果をまとめたものです。

水城跡を巡る手引きとしてお役立て頂ければ幸いです。

本マップに関するお問い合わせ先

公益財団法人 古都大宰府保存協会
〒818-0101
福岡県太宰府市観世音寺四丁目6番1号
TEL (092) 922-7811 FAX (092) 922-9524
ホームページ <http://www.kotodazaifu.net/index.htm>
(史跡解説員による市内史跡の御案内も受け付けております)

一水城跡西側　吉松地区一

水城跡西側の土塁は、博多側が大野城市下大利、大宰府側が太宰府市吉松と2つの行政区に分かれています。

水城にあった東西2つの門のうち、西門には博多湾沿いに置かれた筑紫館（のちの鴻臚館）と大宰府を結ぶ古代官道が通っていました。この道は外国使節団や遣唐使が往来する重要なルートで、西門は我が国の表玄関の役割も果たしていたようです。

①水城西門跡

現在、水城西門跡は切り通し状になって土塁が途切れています。発掘調査の結果、水城の西門は東アジア情勢の変化と密接に連動して3回建て替えられたと考えられており、土塁際では石垣も見つかっています。当初は防御的機能を持つ掘立柱の門だったようですが、奈良時代には外国使節団へ日本の国力を誇示するため、国の表玄関に相応しい礎石を用いた瓦葺きの壮麗な門に建て替えられました。さらに平安時代初めには大陸との関係悪化から防御性を強化した門へと改築されました。



写真提供 九州歴史資料館

②伝　西門礎石

西門跡そばには、西門礎石と伝えられる礎石が残されています。長さ235cm、幅100cmの長方形をしており、表面には、円形や方形の彫り込みがみられます。



西門の東南側一帯は太宰府市吉松ですが地名の由来は、博多湾に入る船の目印となる立派な松が、後背の丘陵地に植えられたことによると伝えられています。地域には、神ノ前竈跡、島本遺跡、前田遺跡、宮ノ本遺跡など数多くの遺跡をはじめ、歴史を伝える文化遺産や古い街並みが残っており、現在も住民の皆さんの手で大切に守られています。



▲発掘調査時の水城土塁断面の様子版築による土層の様子がハッキリ見える。



③土塁断面ひろば

明治時代に九州鉄道（現在のＪＲ鹿児島本線）建設のため水城大堤の一部がカットされた箇所です。2014年には水城築造1350年を記念した断面の発掘調査が行われ、古代の高度な土木技術を知ることができました。2018年に土塁断面ひろばが完成し、解説板や土塁の様子を手触りで知ることの出来る陶板の設置、版築で使われた植物アワブキが植樹されるなど、水城跡の魅力が伝わってくる広場です。

④父子嶋（ててこじま）

JR水城駅近くにある高まりで、地元では水城を造るのに動員された父子が、水城の完成を聞いて、担いでいた「もっこ（土を運ぶ道具）」を放り投げたところ、土が盛り上がって出来たと伝えられています。東門にも「ひとつっこ山」と呼ばれる同様の伝承地が残っています。

⑤西門官道跡（島本遺跡）

奈良時代、筑紫館（後の鴻臚館）から水城西門を経て、道路遺構が見つかった島本遺跡、前田遺跡を通り、筑紫野市杉塚を経由して大宰府政庁へと続く、道幅約11mの真っ直ぐな官道がありました。外国の使節や遣唐使が往来し、我が国に多くの文物をもたらしたことでしょう。

写真提供 太宰府市教育委員会

■水城跡の行事

毎年9月下旬に、古都大宰府を1万本のロウソクの光で包み、提灯を手に散策しながら太宰府の持つ魅力を再発見してもらおうと「太宰府古都の光」が開催されています。国分から水城跡にかけての一带も会場の1つで、地域の園児や児童などが絵付けした約8000個の灯明が並べられて「光の道」を演出しています。



みずき

水城について

水城とは何か？

日本で最初に築造された国家レベルの防衛施設です。土塁の規模は長さ約1.2km、基底部幅約80m、高さ約9mあり、濠には水が貯えられていました。

いつ築造されたのか

日本は、唐・新羅に侵攻され斉明6(660)年に滅びた百済に救援を送りますが、663年の白村江の戦いで大敗しました。唐・新羅の日本への進攻に備え、防備を固めるため664年に水城を築きました。『日本書紀』天智天皇3(664)年には「筑紫に大堤を築きて水を貯えしむ。名づけて水城と曰う」と記されています。さらに水城築造の翌年665年には、大宰府の北を守る大野城と南を守る基肄(椽)城といった古代山城が築かれました。これらの築造には、兵法に通じた百済貴族の関与が『日本書紀』に記されており、水城についても百済の防衛思想や構築技術が導入されたと考えられています。

なぜこの場所に築造したのか

ここは、博多湾側から大宰府へ抜ける平野が最も狭くなる場所で、守りに適しているため、平坦部を塞ぐように築造されました。福岡県大野城市・春日市にも丘陵の谷部を塞いだ小水城と呼ばれる土塁があり、水城大堤と併せて特別史跡水城跡となっています。

水城を1年で築造する場合の労働力

水城の築堤は当時の一大国家プロジェクトであり、大変な労働力と時間が必要であったと考えられています。試算の1例では、「1年間で水城を施工した場合」、1日あたりの作業員動員数を約3500人、1日の作業時間が平均11時間、1年間の作業日数が319日と算出されており、大量の労働力が必要だったことが示されています。

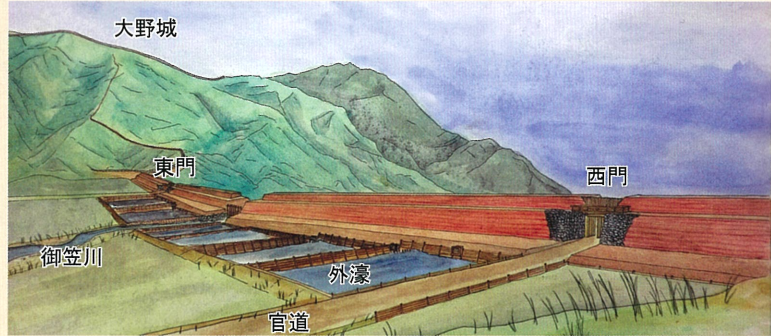
※『大宰府復元』1998年 九州歴史資料館より

《水城1350年の歴史》

時代/和暦	西暦	水城に関する主な出来事
天智 2 年	663	白村江の戦いで大敗する
天智 3 年	664	対馬・壹岐・筑紫に防人・烽を置き、水城を築く
天智 4 年	665	大野城・基肄城を築く
奈良時代		平城京が唐に倣って整備される。九州全体を統括し、軍事・外交を掌る役所として大宰府が機能し始める。水城は軍事的施設から都と大宰府(東門)、博多と大宰府(西門)の出入口・範囲を示す施設となる
平安時代		大宰府の機能が博多へと移行していき、水城は維持されなくなる
文永11年	1274	元寇の時、日本軍は水城まで退却して防衛に備える
文明12年	1480	連歌師・宗祇、太宰府から博多への途中、水城を通る
江戸時代		福岡藩の儒学者貝原益軒『筑前国統風土記』をはじめとする地誌類に古代の遺跡・名所として記される
大正 2 年	1913	国鉄(現 JR)鹿児島本線拡張工事に伴い、水城の本格的な発掘調査が始まり、土塁断面調査が行われる
大正 10 年	1921	国の史跡に指定される
昭和 5 年	1930	国道 3 号線の工事に伴い、東門地区で木樋が発見される
昭和 28 年	1953	特別史跡に指定される
令和 3 年	2021	史跡指定から100年を迎える



◀写真提供 太宰府市教育委員会



水城復原図 イラスト提供 九州歴史資料館

水城の構造

土塁

・版築工法

真砂土と粘土を交互につき固める工法で、土砂崩れを防ぎました。

・敷粗朶工法

軟弱地盤を補強するために樹木の枝葉(粗朶)を敷き詰める工法で、地滑りや地盤沈下を防ぎました。水城の基底部に使われた枝葉は若く実ないことなどから、晩春から初夏にかけて築堤されたと推定されています。

濠

『日本書紀』に「水を貯えしむ」とあり、水城は貯水機能を持った防衛施設であったようですが、発掘調査では謎の部分もまだ多いとされています。

・外濠 …博多側に幅60m、深さ約4mの濠

・内濠 …大宰府側に幅4.5m～10mの溝状遺構

木樋

ヒノキ材の底板2枚と側板・蓋板からなり、内法で幅1.2m、高さ80cmの大きさで、底板2枚は鉄製の銚で留められていました。現在、推定地・抜き取りを含めて4か所確認されています。木樋は九州国立博物館の展示物、学業院中学校の宮村講堂や筑前国分密寺の扁額などに用いられて残っています。

・取水口

県道112号線の太宰府側にT字形の取水口とみられる施設が設けられていたことがわかりました。水はここから土塁の下に埋設された木樋によって内濠から外濠へ送水されました。



水城東門木樋取水口 写真提供 九州歴史資料館



水城跡出土 木樋のカスガイ 写真提供 九州歴史資料館



水城瓦窯跡発掘風景 写真提供 太宰府市教育委員会

⑥水城瓦窯跡

水城跡東側土塁上には8世紀中頃の瓦窯跡があります。登り窯が主流の九州では珍しい平窯で、都で用いられていたものと同じ構造です。天平神護元(765)年、修理水城専知官(しゅりみずきせんちかん)が任命され、水城を修理したことが『続日本紀』に記されており、関連が指摘されています。

一水城跡東側　水城・国分地区一

水城跡東側の土塁は、博多側に太宰府市の水城区、太宰府側に国分区が接しています。水城区は太宰府の玄関口ともいうべきところで、水城跡と県道112号線（旧国道3号線）が交差する付近には、大宰府政庁があった頃、東門がありました。この東門を通る古代官道は博多と大宰府を16kmのほぼ直線で結んでいました。伝説によると菅原道真公は、博多から船で御笠川を上り、水城区にある老松神社辺りの渡し場で上陸したとも伝えられています。国分区の旧道沿いには、道真公に縁のある衣掛天満宮や姿見井などがあります。

古代官道はやがて、博多・二日市・日田を結ぶ日田街道（日田往還）へと移り変わります。江戸時代には街道沿いに松並木が続き、宿屋・酒屋・提灯屋などの店が軒を連ね、多くの人々で賑わいました。

■水城東門跡

古来より太宰府の玄関口としての役割を担い、交通の要衝であった東門ですが、現在門跡は残っていません。しかし、大宰大貳として赴任した藤原高遠が寛弘2(1005)年、水城に到着した際に詠んだ和歌には「岩垣の水城の関に…」とあり、往時には石垣を伴った城門があったと想像されています。また、東門跡そばには、境界を守り悪霊の侵入を防ぐ塞の神がいつの頃からか祀られています。



⑦東門礎石

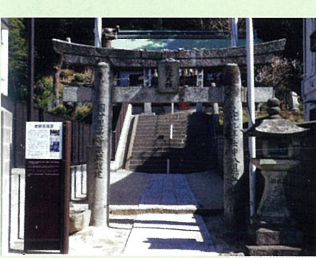
礎石は240×80cmの長方形をしており、上面には門柱や軸受けの穴が掘りこまれています。江戸時代の『筑前名所図会』には「東の方大路の傍に、門の礎一つ残れり、是を俗に鬼の硯石といふ」と記されています。

水城は地名の由来となっており、地元の人々に大切にされ、守られてきた史跡です。1350年の歴史を経て今なお静かにその雄姿を伝えています。これからも大切に見守り、未来に伝えていきたいものです。散策しながら歴史のロマンや景観を楽しんでください。



⑧水城大堤之碑

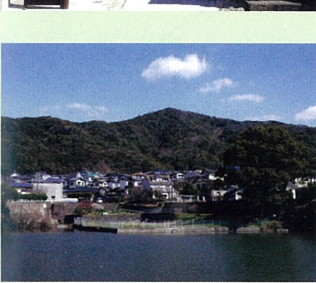
大正4(1915)年11月の大正天皇御大典の記念事業として、水城村青年会の発案により大正5年5月に建立されました。碑の背面には、水城跡の歴史と正確な実測結果が刻まれています。碑の建立にあたって台座は宝満山から、碑文を刻む棹石は博多から青年会が自ら運ぶなど地元の人々の尽力によるものでした。



⑨衣掛天満宮

菅原道真公が大宰府へ入る前に着替えた衣を松と石に掛けたという故事に因み、後世の人がここに社を建めました。

拝殿入口に掲げられている扁額は、本殿裏山の枯れた松(御神木)を用いて作られたもので、絵馬などにも使用されています。



■四王寺山(烽火場の置かれた山)

「太宰府旧蹟全図」（北図）には、国分村から広目天のケイサシノ井へ至る尾根（現在の国分地区より水城口城門へ登る道）に「火ノヲ」の記載があります。「火ノヲ」「火ノ尾」とは古代の大野城時代の烽火場です。烽火場がある山は、麓から三角のおにぎり型に見え、調査ボランティアでは三角山と呼んでいます。

■水城跡の自然

春は菜の花が咲き、土塁に満開の桜並木を楽しむ人々で賑わいます。秋には風に揺れるコスモスが、そして見上げれば五色の紅葉に染まる四王寺山が心を和ませてくれます。

「ださいふ」の**大**と**太**

律令政治機構の役所を指す場合は「**大**宰府」と**大**を使い、現在の行政名「**太**宰府市」や「**太**宰府天満宮」は**太**を使います。